



Team Dainan

八千代市立大和田南小学校
《校長室だより》
令和3年度 第3号
令和3年 4月23日

マッチで火がつけられますか？

～危険だからこそ、安全な使い方を教えていかなければなりません。～



皆さんは「肥後守(ひごのかみ)」って知っていますか？「肥後守」は、いわゆる折り畳み式の小刀です。大和田南小学校が開校するちょっと前の時代、子供たちにとって、鉛筆を削ったり、水鉄砲や竹とんぼを作ったりするための道具として欠かせないものの一つでした。

しかし、鉛筆削りの普及や刃物は危険という考えから、やがて肥後守は姿を消しました。刃物は使い方を間違えれば危険なものです。当時のニュースで、「禁止をするのは簡単だが、刃物のこわさを子供が身をもって学ぶ機会が失われたのではないか」という意見もありました。

さて、時代は昭和から平成、そして令和になりました。「肥後守」以外にも私たちの身の回りから姿を消しつつあるものがマッチです。お風呂は、ボタンを押すだけでお湯が張られます。台所のコンロもボタンを押すだけのガスコンロか、火さえも使わないIHです。私たちの生活の中で、マッチを使う機会は、ほとんどなくなりました。

先日、6年生が理科の学習でマッチの使い方を学んでいました。マッチなんて誰でも使えると思っているかもしれませんが、マッチの使い方を知らない子供は、決して少なくありませんでした。マッチに火が付いた瞬間、驚きの声をあげる子、火のついたマッチ棒の向きをどうすればいいのか分からず、「どうしよう、どうしよう」と戸惑いの姿を見せる子供もいました。なかなか火がつかず、何とか火が付いたときには、拍手が起きた班もありました。

ところで、どうしてマッチをこすただけで火がつくのかご存知ですか？マッチ棒の頭は硫黄や松ヤニなどでできています。マッチ棒の頭は、発火点が高く、そう簡単に火はつきません。そこで、このマッチ棒の頭をマッチ箱の横に張り付けてある茶色い紙にこすりつけると、茶色い紙に付いている「赤リン」が少しはがれてマッチの頭につきます。この「赤リン」は発火点が低く、こすったときの摩擦熱で燃え出し、それがマッチ棒の頭に燃え移り、火がつくのです。何と、火が付いた瞬間のマッチの温度は、2,500度にもなるそうです。

何回も使っているマッチ箱は、赤リンがはがれてしまい、いくらこすってもなかなか火が付きません。火がつかないと子供たちは、力任せにこすするため、すぐにマッチの棒が折れてしまいます。マッチに火をつける重要な役目をはたしているのが、「赤リン」であることを知っていれば、茶色い紙の使われていない部分でこすればよいことに気付くことは容易です。

人類が最初に火を使うようになったのは50万年以上前だと言われています。火を使うようになり、人間が人間へと進化したのです。火は、人間の文化の象徴でもあり、進化の根源であると言えます。どんなに時代が変化しようともそのことは変わらないと思います。

「刃物」も「マッチ」も子供たちの日常生活の中で使うことはほとんどなくなってしまいました。どちらも使い方を誤れば、命の危険があります。しかし、危険があるからこそ、安全な使い方を教えていかなければならないと思います。そこに、学ぶ価値があるのだと思います。